
IS ~ 星を目指す黒 ~

飛龍明浩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（星を指す黒）

【Nコード】

N9411Y

【作者名】

飛龍明浩

【あらすじ】

IS<インフィニット・ストラトス>とは、別の意味を持つIS<インフィニティ・システム>を搭載した機体を持つ少年、矢上龍也。

彼はISの性能テストのためIS学園へと入学する。

そして、彼は学園で起こる数々の事件へ巻き込まれていく。

第一話〜星を目指す者〜（前書き）

同時に書いててこっちのほうに乗りに乗って完成が早かった。

月末までにはもう片方もしあげます。

第一話 星を目指す者

第一章 星を掴むために
くもつひとつのIS

IS学園。インフィニット・ストラトス、通称ISと呼ばれるマルチフォーマルスーツを操縦するための学園だ。

その中に異彩を放つ人物が二人いる。

初の男性IS操縦者としてニュースで発表された織斑一夏。そして、この俺、矢上龍也だ。

本来であればISというものは女性にしか扱えない代物である。しかし、織斑一夏に関しては、前述のとおり理由で身の安全という面でこの学園に通うこととなった。

俺に関しては、ISのおかげで女尊男卑の世界を変えるべく、一部のマッドサイエンティストと呼ぶにふさわしい人物達が作ったインフィニティ・システム、こちらも略称ISが何処までISに通用するかを見るために某所から派遣されてきたテスターだったりする。

インフィニティ・システムについてはいずれ紹介するでしょう。

女子高に男子が紛れ込んだようなものなので、好奇の視線にさらされることは覚悟していたが、これはきつい……。

「皆さんそろっていますね、それではSHR始めますよー」

すこしおっとりとして、どこか抜けていそうな雰囲気的女性が教

壇に立ち自己紹介をする。どうやら、副担任の山田真耶先生らしい。わりとはつきりと自己紹介をしていたがあくまで副担任らしい。おい、担任は何処へ行った？

「それでは、出席番号順で自己紹介をお願いしますね」

哀れもう一人の男子、織斑一夏。名前が早いがために俺より先に自己紹介をさせられるようだ。

「織斑君。織斑一夏君！」

「は、はいっ!?!」

ボーっとしていたのが、山田先生に呼ばれたため驚いて思わず叫んでしまった。さらにそれに驚き山田先生がものすごく腰を低くして織斑に自己紹介をお願いしている。その光景を見ながら、ものすごく帰りたくなってきた。

「織斑一夏です……」

沈黙が続く。何を言っているのか困っているようだ。近くの子に助けを求めるように顔を向けるが、すぐさま顔そらされている。こちらにも顔を向けようとしていたが、視線を向けられる前に顔を窓の外へ向ける。ああ、今日の空も蒼いな……。

「以上です」

まるで、某お笑い番組のように椅子からほとんどの人が席から転げ落ちる。ある意味、ハードルが低くなって自己紹介が楽になった。

バシんツ、と何かをたたくような音がする。

「げえ、関羽!?!」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者め」

スーツを着た凜々しい女性が教壇へ向かっていく。

「諸君、私が諸君の担任の織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。逆らってもいいが、返事はイエス以外受け付けん」

「キヤーーーーー!」

あまりの音量に耳をふさぐ。死ぬかと思った。そうか、この人が担任か。俺、生きていけるかなあ……。

周りの話を聴いていると、どうやらIS関係で世界的に有名な人らしい。ISのニューズなど、研究所のほうでは技術関連以外はタブーだったからな。情報なんて入ってくるはずがない。

その後の会話で判明したのだが、どうやら担任は織斑一夏の姉らしい。姉弟で教師と生徒、しかも同じクラスってのはどうなんだろうか。

騒ぎがいったん収まり、自己紹介がつつがなく進んでいく。そして、とうとう俺の番まで来た。

「よし、次は矢上。自己紹介をしる」

「はい。矢上龍也です。字だけ見ると『タツヤ』と呼ばれますが、『リヨウヤ』です。趣味は読書、主に技術書を読んでいます。将来の夢は宇宙へISを使って行くことです。よろしく願います」

とりあえず、これだけ言っておけば文句は出ないだろう。

「よし、次……」

織斑先生の威圧でそのまま自己紹介は続けられた。そして、全員の自己紹介がおわったところで、『一時間目』の終了のチャイムが鳴る。

ISの専門的な学校とはいえ、世間一般では高校に分類されるIS学園である。ISの授業に多く時間を割くとはいえ、消費しなければ鳴らないカリキュラムがあるわけ。

そのために入学式初日から一日フルで授業という素敵な時間割が通達されている。

精神的に疲れているので帰りたいです。

休み時間になると、こちらに織斑がやってきた。

「よ、よお」

「ん？」

「大変だな、男二人だと」

「そうだな。まあ、女子高に男二人が紛れ込んだような状況だ。あの程度は覚悟しないとこの先やっていけない」

「そんな簡単に俺は割り切れないなあ」

目の前のさわやかイケメン、織斑一夏は苦笑しながら俺の言葉に返事を返す。

「少しいいか？」

「箒？」

織斑が視線を向けて顔を背けた女子だ。なるほど、知り合いだったのか。

「俺のことはいいから行ってやれ」

「あ、ああ。すまん」

箒と呼ばれた女子に連れられて織斑はどこかへ行ってしまった。しかし、箒か。掃除用具の一つだよな。あだ名か何かか。後日、本人にこのことを聞いたらものすごい勢いで怒鳴られてしまった。口は災いの元だ。

「ちよつと、よろしくって？」

「ほえ？」

織斑たちの方に意識を向けていたため、声をかけられて間抜けな返事をしてしまった。

「まあ、なんてはつきりしない返事ですよ!？」

「すまん。ボーっとしてた。で、どちらさまですか？生憎と、まだ

クラスのメンバーの顔と名前が一致しないんで改めて自己紹介をしてほしいんだが。ああ、俺は矢……」

「わたくしのことを知らない！？イギリスの代表候補生であるこのセシリア・オルコットを！？入試主席であるこのわたくしを！？」

ああ、典型的な女尊男卑思考の方だ。嫌いとはまでは言わないが苦手な部類の人だ。

「すまん、世間に疎くてな」

「まあよろしいですね。わたくしはイギリス代表候補生である前に一人の淑女ですから、この事は水に流して差し上げましてよ、ヤガミ・タツヤさん」

「リョウヤだ」

「あら、失礼いたしましたわ。ああ、あなた男性なのでISに詳しくありませんでしょうか？よろしければわたくしが教えて差し上げてもよくなってよ」

無性に殴りたくなってくる言い回しだが我慢だ。何処その企業のお偉いさんを相手にするよりかはかなりました。

「間に合っている」

「あら、実技でもよろしくってよ。何せ、『唯一』試験で教官を倒したのですから」

ああ、そんな試験もあったな。

「あれか。俺も勝ったな」

言ってしまったって後悔する。この手の人物は自分が一番だと思っているパターンがおおいのだ。確実に余計な種をまいてしまった。もはや回収不可能だ。流れに身を任せよう。

「ほ、本当ですよ……？」

「あ、ああ。不意打ちに近い形だったが何とか辛勝といったところだったが」

われながらあれは卑怯だと思った。教官の方には申し訳ないことをした。

時間がたったのか、チャイムが鳴り響く。二時間目の準備をしなければならぬ。

「ま、また後で来ますわ！覚悟してなさい！」

何を覚悟しろというのだろうか。そんなことより、今度は自分の名前を間違えないで言って頂きたい。名前を間違えられるってのはなかなかきついですよ。

二時間目の授業が終了する。そして、不気味な威圧感を出しながらオルコットがこちらに向かってくる。

だが、俺は現在それどころではない。ある場所へ急いでいかなければならないのだ。

「ちょっと、何処へ行くおつもりですの!？」

「トイレだ!」

本来女子しか居ないはずのこの学園。男子トイレは職員室が事務室近くまで行かないとないのだ。さらに言うなら、そこまでの距離はかなり遠い。急いで行かなければ次の授業に間に合わない。

「し、失礼しましたわ……」

オルコットから了解をもらい、急いで用を足しに行く。

なんとかぎりぎり帰ってこれたと思いきや、教室の中からオルコットの叫び声が聞こえてくる。

「お、お、覚えてなさい!」

織斑に向かって捨て台詞を吐いて自席に戻っていくところだった。先ほどの俺とのやり取りに似たようなことがあったのだろう。ひとまず、織斑に話しかけておく。

「どづしたんだ？」

「さ、さあ？」

さて、織斑先生の初授業。普通の授業かと思いきや、いきなりクラスの代表を決めると言い出した。

「自薦・他薦は問わん。誰か意見があるやつはいるか」

「はい！織斑君がいいと思いまーす」

「私もー」

「お、俺！？」

自薦・他薦問わないのだったらそうなるだろうな。そして、この流れだと当然。

「私は矢上君を推薦しまーす」

「私も矢上君に一票ー」

「ですよねー」

しかし、俺が乗っているのはインフィニット・ストラトスではないので、推薦されてもなれない気がしないでもない。まあ、こうなるとあの人が反応しそつだが。

「納得いきませんわ！男がクラス代表なんていい恥さらしです。私に、一年間もそんな屈辱に耐えろというんですの！？」

いや、その理屈はおかしい。

「実力から行けば、入試主席である私ができるのは必然ですわ。それを、物珍しいからといって、極東の猿にされては困ります！まあ、ISを動かせるその一番前の関の猿はいいとしましょう」

織斑が人類という枠からはずされたようだ。織斑がムスっとして

いるが、まだ耐えている。が、流れるに次は俺がなにか言われる番だな。

「DSSDでしたかしら？そこが作り出したISMドキに、クラス代表が務まるとは思えませぬわ。所詮は猿真似で作りあげた代物。ああ、猿にはお似合いの代物ですわね」

「おい、おま」

「黙れよ」

織斑が何か言おうとしたが、それをさえぎり俺は立ち上がる。おれ自身が馬鹿にされるのはかまわないが、必死に俺の愛機を作り上げてくれた研究員達のこと馬鹿にされて黙っていられるほど俺は大人ではなかった。

「ああ、確かにISの猿真似で作り上げたもんだらうさ。だがな、ろくに俺の使っているインフィニット・システムのことを知りもしないくせにでかい口たたくんじゃねえよ」

「そのくらい知っていますわ。たかだか一研究施設が宇宙を目指しているだけじゃありませんの。まったく、どこの援助も受けられないとは可哀相ですわね」

「まったく分かっていないな。援助を受けられないんじゃない。援助を断っているんだ。いいだろう、そんなにISが優れていると思っっているなら俺がお前を倒してやるよ」

「望むところですね。この代表候補生であるセシリア・オルコットに勝負を挑んだことを後悔するといいですわ」

お互い視線に火花を散らしながらにらみ合う。お互い、今すぐにも勝負を始めようとしている。それを見かねたのか、織斑先生が溜息をつきながら、解決案を提示してきた。

「よし、では一週間後にアリーナで対戦を行いクラス代表を決定するでしょう。参加者はオルコット、矢上、織斑の三名だ。各自、準備を怠らないよう」

「ちよつ、千冬姉！俺もかよ!？」

「織斑先生だ、馬鹿者が。それに、自薦・他薦を問わないといった推薦された時点で貴様の参加は決定している」

「ハッ、覚悟しておくんだな」

「あら、わたくしに勝てると思っているのなら、その鼻へし折って差し上げますわ」

こうして、入学初日は過ぎていった。

第一話〜星を目指す者〜（後書き）

タイトルから主人公の機体を当てた人はおそらく正解です。スターゲイザーで黒と言ったらあの機体しかありませんからね。でも、名前は言わないでおきます。

バレバレだけど、楽しみにしておいてください。

次回は龍也とオルコットの対決。

なのはの戦闘よりすらすら脳内で戦闘シーンが沸きあがってきたんだがどうしたものか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9411y/>

IS ~星を目指す黒~

2011年11月28日01時53分発行